

武蔵野日曜集会

我を喰い我を飲めよ

——ヨハネ伝第6章22～71節——

1967年11月12日（武蔵野）

小池辰雄

神の国の顕れの徴 神の業 信交・信行、飛び込みの世界 天国人 神のパン 我は生命のパン
 ン 我を喰い我を飲め 一体・内在関係 霊なり生命なり 逆徴の福音 一緒にご馳走を食べよう

【ヨハネ6・22～71】

22 明くる日、海のかなたに立てる群衆は、一艘^{そう}のほかに船なく、又イエスは弟子たちと共に乗りたまわず、弟子等のみ出でゆきしを見たり。23（時にテベリヤより数艘の船、主の謝して人々にパンを食^くせ給いし処の近くに来る）24ここに群衆はイエスも居給わず、弟子たちも居らぬを見てその船に乗り、イエスを尋ねてカペナウムに往けり。25遂に海の彼方にてイエスに遇いて言う『ラビ、何時^{いつ}ここに来り給いしか』26イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らが我を尋ぬるは、徴を見し故ならでパンを食いて飽きたる故なり。27朽つる糧^{かて}のためならで永遠の生命にまで至る糧のために働け。これは人の子の汝らに与えんと為^するものなり、父なる神は印して彼を証し給いたるに因る』28ここに彼ら言う『われら神の業^{わざ}を行わんには何をなすべきか』29イエス答えて言いたもう『神の業はその遣し給える者を信する是れなり』30彼ら言う『さらば我らが見て汝を信せんために、何の徴をなすか、何を行うか。31我らの先祖は荒野にてマナを食えり、録^しして「天よりパンを彼らに与えて食^{くら}わしめたり」と云えるが如し』32イエス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、モーセは天よりのパンを汝らに与えしにあらず、然れど我が父は天よりのパンを与えたもう。33神のパンは天より降りて生命を世に与うるものなり』34彼等いう『主よ、そのパンを常に与えよ』35イエス言い給う『われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。36然れど汝らは我を見てなお信ぜず、我さきに之を告げたり。37父の我に賜うものは皆われに来らん、我にきたる者は、我これを退けず。38夫^{それ}わが天より降りしは我が意^{よこ}をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。39我を遣し給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我そ



の一つをも失わずして終の日に甦えらする是なり。⁴⁰ わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし』

⁴¹ここにユダヤ人ら、イエスの『われは天より降りしパンなり』と言い給いしにより、⁴² 呟きて言う『これはヨセフの子イエスならずや、我等はその父母を知る、何ぞ今「われは天より降り」と言うか』⁴³ イエス答えて言い給う『なんじら呟き合うな、⁴⁴ 我を遣しし父ひき給わずば、誰も我に来るのと能わず、我これを終の日に甦えらすべし。⁴⁵ 預言者たちの書に「彼らみな神に教えられん」と録されたり。すべて父より聴きて学びし者は我にきたる。⁴⁶ これは父を見し者ありとにあらず、ただ神よりの者のみ父を見たり。⁴⁷ 誠に、なんじらに告ぐ、信ずる者は永遠の生命をもつ。⁴⁸ 我は生命のパンなり。⁴⁹ 汝らの先祖は荒野にてマナを食いしが死にたり。⁵⁰ 天より降るパンは、食う者をして死ぬる事なからしむるなり。⁵¹ 我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん』

⁵²ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』⁵³ イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。⁵⁴ わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦えらすべし。⁵⁵ それわが肉は真の食物、わが血は真の飲物なり。⁵⁶ わが肉をくらい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。⁵⁷ 活ける父の我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。⁵⁸ 天より降りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらず、此のパンを食うものは永遠に活きん』⁵⁹ 此等のことはイエス、カペナウムにて教うるとき、会堂にて言い給いしなり。

⁶⁰弟子たちの中おおくの者これを聞きて言う『こは甚だしき言なるかな、誰か能く聴き得べき』⁶¹ イエス弟子たちの之に就きて呟くを自ら知りて言い給う『このことは汝らを躓かするか。⁶² さらば人の子の原居りし所に昇るを見ば如何。⁶³ 活すものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり生命なり。⁶⁴ されど汝らの中に信ぜぬ者どもあり』イエス初より信ぜぬ者どもは誰、おのれを売る者は誰なるかを知り給えるなり。⁶⁵ 斯て言いたもう『この故に我さきに告げて父より賜わりたる者ならずば我に来るを得ずと言いしなり』

⁶⁶ここにおいて弟子等のうち多くの者、かえり去りて、復イエスと共に歩



まざりき。⁶⁷ イエス十二弟子に言い給う『なんじらも去らんとするか』⁶⁸ シモン・ペテロ答う『主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言は汝にあり。⁶⁹ 又われらは信じ、かつ知る、なんじは神の聖者なり』⁷⁰ イエス答え給う『われ汝ら十二人を選びしにあらずや、然るに汝らの中の一人は悪魔なり』⁷¹ イスカリオテのシモンの子ユダを指して言い給えるなり、彼は十二弟子の一人なれど、イエスを売らんとする者なり。

●神の国の顕れの徴

²² 明るる日、海のかなたに立てる群衆は、一艘のほかに船なく、又イエスは弟子たちと共に乗りたまわず、弟子等のみ出でゆきしを見たり。²³ (時にテベリヤより数艘の船、主の謝して人々にパンを食せ給いし処の近くに来る)²⁴ ここに群衆はイエスも居給わず、弟子たちも居らぬを見てその船に乗り、イエスを尋ねてカペナウムに往けり。²⁵ 遂に海の彼方にてイエスに遇いて言う『ラビ、何時^{いつ}ここに来り給いしか』²⁶ イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らが我を尋ぬるは、徴を見し故ならでパンを食いて飽きたる故なり。²⁷ 朽つる糧^{かて}のためならで永遠の生命にまで至る糧のために働け。これは人の子の汝らに与えんと為るものなり、父なる神は印して彼を証し給いたるに因る』

五千人の者たちになつた五つのパンと二つのお魚から飽き足るばかりに食物を与えたという驚天動地の事実が展開したわけです。奇蹟中の奇蹟ということで、全然我々の判断には絶えるところの事態です。それだから、

「徴を見たのではなくて、パンを食って飽きたのでやって来たのだろう」

と。言われた

「ユダヤ人は徴を求め、ギリシヤ人は知識を求める」

とパウロが言いましたが、キリストはその徴を、この場合に肯定して言つてらっしゃるわけです。「徴」は「セイメイオン」という字です。

「パンを食いて飽きたる故なり」

というのは御利益宗教です。御利益的に何か具体的にそこに奇蹟が現われて、それを受けたものだから非常に驚いて喜んで、というのが普通の民間の宗教の大部分です。健康になるとか、金があるとか、家内安全であるとか、安心立命であるとか、とにかく自分の側がいわゆる幸福になることを求める。

ヒルティは『幸福論』という本を書きまして、どうなのが幸福かということ論じてますけれども。およそ幸福目当ての事態はみな御利益宗教です。その結果が自ずから幸福であるというのと、幸福を目当てにするというのとは大違いなんです。そこがうつかりする



と間違える。もし、福音と宗教が違うならば、いわゆる宗教は幸福主義である。福音はそうではない。福音はどこまでも神の栄光の現われること、神の意志の成ること、そこに本当に喜びを受ける。それは幸福を目当てにしているのではない。自分の側の幸福を求めるということは要するに自己中心ということなのです。

今度は、そいつを逆にはき違えて、自分をえらく傷めつけるところの、いわゆる禁欲主義というのがある。こないだ私が講義した、ゾイゼ(Hインリッヒ・ゾイゼ、1295～1366)というのがそうです。

「十字架を負いて我に従え」

というから、彼は本当に十字架を作って、釘をそこに出してにおいて、肩に釘をひっかけて血が流れる。そういうようなことをして十字架を負おうとしたり、刺のある帯をしてみたり、非常に自分を傷めつけて、もう死ぬ一步手前までできてしまったが、そこには何の本当の平安もない。そこで、彼は持っていた自分を傷めつけるようないろんな拷問的な禁欲の道具を全部、ライン河に流してしまった。キリストとの本当の交わりというものはそういうものでなかったと悟ったという。お釈迦さんもそうです。自分は大いに難行苦行したが、いわゆる難行苦行が本当の道ではない。また、自分の幸福を求めても、これも違う。右でも左でもない。本当の中道があるわけですね。

この場合は、イエスが、

「徴を見し故ならで」

と、「徴」と言われる。これは神の栄光の顕れの徴であります。人間の幸福の徴ではない。神の国の顕れの徴なんです。神さまが本当に五千人にその食物を与える。キリストを通してそのことをなさった。永遠の生命はかくのごときものであると。分かち与えて限りないものである。そういう事態を現しておられるので、五千人が飽き足りるようなそういう事態にでつくわして、神の永遠の生命の事態を受けとらないならば、本当にキリストを見ているのではないと。これがキリストの仰った内容である。

私が『曠野の愛』という雑誌を出して、初めて印刷した雑誌が第26号であります。『逆徴の福音』と題してこの26号を書いた。「言い逆らしいの徴」です。クリスマス(1956年)に東京療養所で語った内容です。この26号は私が書いたものの中で大事なものの一つです。実は、徴中の徴がキリスト自身であった。イエスこそが本当に徴である。

「言は肉となりて、我らの中に幕屋を張り給えり」

という。ヨハネ伝1章14節に、即ち霊言なるキリストが具体的なイエスとなって地上に現われた。これが神の言の根元の徴である。イエスという方そのものが神の徴である。この徴にみんな躓いたわけですね。とうとう十字架にかけるまでに躓いてしまった。

創世記から黙示録に至るまで聖書の語っているところはみな神の徴なんです。もう言い出したらきりが無い。「契約の徴」というようなことがノアの洪水のところに出てくる。虹



を指してそう言った。アブラハムるときにもそうです。エリヤ、エリシヤ、預言者たち、そこに徴が与えられた。彼ら自身、一人びとりが神の徴的な実存を歩いていた。

●神の業

28 ここに彼ら言う『われら神の業を行わんには何をなすべきか』

「われらは何をなすべきか」という問いは、よく、青年が、聖書研究会や何かのグループが時々言いますが、いつかも、早稲田大学でそんな題で私に話させたことがありますけれども。「神の業」というのは複数で書いてある。

「神のもろもろの業をするには、私たちは何をしたらいいか」と。

29 イエス答えて言いたもう『神の業はその遣し給える者を信ずる是れなり』

これは大事な答えです。このときの「神の業」は単数で書いてある。彼の中へと信ずる、

「彼を遣わし給いし者の中へと信じ込むことはなり」

ということ。「神的な業を、この業かの業をしようと思ったなら何をしたらいいですか」と聞いたならば、もろもろの業というものの中心をキリストは答えて、

「いろいろな業の中心になるところの焦点の業、それは信ずることだ」

と。だから、神的な業というものは「信ずる」ということ。信ずることが実は業である。ここでもちゃんとキリストの言葉でそういうことが出ている。信こそまことの行である。

「信ずることが行い中の行いだよ」

という。行いの焦点である。「信じてから、それから何か行為を」なんて思ったたらダメだと。いつも私が申し上げているとおりなんです。信ずるとは内的な一番根元的な行為です。

「仕方がないから、まあ信じておこう」

なんていうのは絶対に信仰でも何でもない。あるいは、自分で力んで何か信念的に凝り固まってみても、それもダメです。

一番行為中の行為は、信ずるというのは、一体、その行為そのものの、信ずるという行為そのものは何か。自分をあてにすることではない。あてにする主体がある。神の徴であるところの、神の出店であるところの、このキリストです。私たちが、「神」と言っても、キリストを抜きにして「神」なんて言ったってダメだよ。「キリスト」と言うときには必ず、それは神の具体的な現象体としての神ですから。「神の子」という表現があつても、キリストはその意味において神なんです。神の具体的表現体です。そのことを、

「キリストは神か、神の子か」

なんて妙な議論をやっているのは、私にはおかしくてしょうがない。

キリストを信ずるとは、それが行為だと言うのだから。行為的に信ずるというその行為というのは、心の状態ではないのだから、行為なんだから、どうしたってこれは——手足



をただ動かしているくらいでは行為ではない——本当の行為というのは全身を投げかけることが行為である。分裂のないただ一つの行為と言うのだから、これは全身を投げかけるよりしか仕方がない。手でものを書いたり、足で歩いたりしているのではない。全身的に自分を投げかける。それはいつも、知情意も手足も全部、全存在的に自分を投げかけると言ってもいい。

「中へ」と書いてあるのだから、中へと信じていく、中へと自分を入れていく。上からくるのも、下からくるのも同じことです。

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。天を叩け、さらば開かれん」

という。これはみんな全身的な行為ですからね。全身をもって求める。頭で求めているのではないぞ。全身で体当たりして叩け。ただ手でノックしているのではないぞと。そういうのが、あのキリストの言葉である。キリストの言葉というのは分裂してないですから。

それが本当に私たちの悲願なんです。悲願とは、全身的に自分をぶちまけいくということが悲願です。そういう悲願に対してこの本願は答えてくださる。そういう悲願をもって来るやつがいらないかと思つて待つているわけだ、神さまの方は。ところが、なかなかこれが来ない。それではダメなんだ。集会にいろいろな事情で来ない。私は心が痛む。せっかく大事なチャンスのをがして、ああ惜しいなあと。求めが命懸けでないから。

「命懸け」とは素晴らしい言葉だ。命懸けで求めていかなければ生命は得られない。生命ですからね、この世界は。福音は生命を与えるのに、命懸けで来ないでいいような、そんな安っぽいものではない。福音は百円出せば得られるなんて、冗談じゃない。百円なんて問題じゃない。一万円位払わなければ（笑）。それは冗談ですが。命懸けで求める。

「今日の糧を——私は三百円でこの一日の生活をしようと思つてます——よし、その三百円を全部投じよう」

と。これは命懸けで来ている人です。そういうのが——なにもそうしろと言うのではないですよ——それだけの気合を持つてかかつていく。お昼のパンを買うお金がないなら、断食して聞いていればいい。電車に乗るお金がないなら、歩いてくればいい。私は特に青年男子の諸君にそれだけの気構えを欲します。それでなかったならば、一騎当千の士にはなれない。

●信交・信行、飛び込みの世界

命懸けで求めることを「神技^{かみわざ}」という。分裂してないから単数で書いてある。

「神の技はその遣わし給いし者を受けとる是なり」

と。受けとる。「信仰」という字は、私はもうよそうと思つてゐる。信仰なんて、仰いでいるものだから、遠くなつてしまふ。仰いでばかりいるものだから、無教会なんてものは「十



字架、十字架」と、一生懸命で「十字架」と言っているけれども、十字架を仰いでばかりいる。内村先生が、「仰ぎみる」なんてことをさかんに仰るものだから。内村先生が何と言おうが、真剣に自分の全存在で、はらわたで受けとったその表現を示さなくては。どうしたって、私は「仰」という字は「交わる」という、「信交」と書かざるをえない。キリストと交わる世界に来ないで、何が本ものになるか。第二の宗教改革をあなた方は自分でやってくださいよ。

それはイエスは――「深降」という――深く降^{くだ}っている。イエスは天上から深く我らの中に降って、深降している。キリストが――降誕ではない――深く降^{くだ}ってきたから、これと進んで交わらなくては生命の世界には入れない。

「神のわざはその遣わし給いし者を信する是なり」

という。また、

「信仰とは神のわざである」

とまでルターが言った。ルターの「ロマ書序文」というのは必ず一遍読まなくてはダメですよ。

「本当の信仰とは、我々の中における神のわざであって、それが我々を変質させてしまう。そして、神から新しく生まれさせる。旧きアダムを殺して、我々を、心でも心情でも思いでも、またいろいろな力においても、全く別な人にしてしまう。そして、聖霊を伴ってもたらすものである。信仰とは何と生き生きとして活動的で、奉仕的な力強いことがらではないか。」

と言っている。どうして、こういう言葉に本当に共感しないかと私は思っている。「ルター、ルター」なんてみんな言っているけれども。

「それだから、その信仰は間断なく善きことをせざるをえない。それをしないということとは不可能である。即ち、信仰はもう、善き業がなされうるかということ、あるいはなされるべきかということ、聞かない。そんなことを聞いているひまに、もう既に善き仕事を、善き業をしているし、いつもその善き行為の中にある。常に行方してやまないものである。」

と。だから、ルターにとっては、信と行とは分かれることができない。だから、それを「信行」と書く。「信じ行う」と書く。信じ交わる(信交)、信じ行う(信行)という世界。それが本当の「しんこう」で、信じ仰ぐのではない。もちろん、始めは十字架を仰いだっていけれども、その中に飛び込まなければダメです。飛び込むことが即ち、

「われキリストと共に十字架せられたり」

という、これが交わる世界です。「共に十字架せられたり」と。

「聖書の一点二画も、もし聖霊がなければ、これをつかむことができない」

と、ルターが言っている。ルターさんがいかにこの聖霊ということを本当につかんでいたか。



ルターの読みそこないをだいぶやっているようですが。

●天国人

そういうことで、このキリストを受けとること。「キリストを受けとる」とは何ですか。「キリストを受けとる」ということは要するに

「御霊のキリストを受けとる」

ことです。イエス・キリストは天上に一人しかいない。みんながキリストを受けとったら、なんてことになる。そうじゃない。天上の一人のキリストは、相手が何億人いようが全的にこれを受けとることが出来る。それが御霊の消息です。御霊のキリストは全的に、太陽

の光は全地に全的に光っている。何分の一かではない。

そういうように全的に御霊のキリストを受けとることが「信ずる」ということである。これが一番根元的な業中の業である。行為中の行為である。それは全存在をもつてぶち当たることである。それは一体どうしたらいいんですか。分かったような分からないようなわけでしょ。それはどうしたらいいか。それは、申し上げているとおり、「祈り」がそれなんです。祈りはそういう深い行為であるんですよ。

「祈りは行為である」

なんて私は今日初めて言ったかどうか知らんが。祈りこそが本当の、自分を投げかけ、キリストを受けとるところの行為なんです。

祈りとは、言葉で何かを——こうやって集会で祈るときには、なるほど言葉で祈るけれども——黙っていて、目もつむらないで開いたままで、手も合わせないで、道を歩いていても、祈りは自由自在であります。そういうことにならなくて。祈りというと、こういう形をしてこうでなければと。なるほど、私はみんなでこういう所で祈るときには、

「胸に手を合わせなさいよ。祈りの体勢としてよろしいから」

と、そう言いますよ。けれども、何も、どういう形だとか、どういう祈り方だとか、そんなことはひとつも関係ない。

「あの集会へ行くと、どうも祈りがちよつと普通のと違って、うまくないから、あそこはよそう」

なんてね。そんな体裁を考えているからダメだ。何をするのでも、とにかく、いっぺんは——「きちがい」という言葉は好きではないけれども——気の狂っているような、

「あいつは少しおかしいのではないか」

と言われることを厭うような気持ではダメです。なにもおかしくならなくたっていい。おかしくならぬ方がいいですよ。けれども、とにかく、体裁を考えているうちはダメなんです。



とにかく、あるひとつの目的を達成しようと思ったら――人間は一生に一つのことしか本当ではないんだよな。しかも、自分の好きなことしかできない――好きなことにこの全生涯をかけていけばいい。もう私は、人生はその点で63年まちがえた。60年くらいかな。まあ3年くらいはそんなでもなかったけれども。それで、私は3歳の童子という。だから、マイナス60年だ。60年もマイナスしてしまった。とんでもない。あなた方はそんな馬鹿げたマイナスをしないようにしてください。ひたむきにそれに向かっていく。

ベートーベンも自殺しようと思った。けれども、彼はつんぼになつたけれども、

「この音楽のために自分はお生命を懸けていく」

と。偉大な作品はみんなつんぼのときに作られた。ミルトンがめくらになつたあと、娘さんたちに口授して、あの『パラダイス・ロスト』を書いた。私もどこでぶつ仆れてもいい。とにかく、ある一つの聖なる野心を持っています。それにこれからの生命を懸けたいと思います。皆さんは一人ひとりが一生涯を通して、その人でなければならぬ在り方がある。何をしたらいい。みんな自分のそれぞれの在り方で、神さまに、

「汝はわが愛しむ子なり、われ汝を悦ぶ」

となれば、人にどう思われたっていい。どうぞ、地上の生涯はそうにして常に永遠の質を持つ。即ち、それが天国人、であります。そのような永遠の質を持つて行くことです。

●神のパン

³⁰彼ら言う『さらば我らが見て汝を信ぜんために、何の徴をなすか、何を行
うか。³¹我らの先祖は荒野にてマナを食えり、

出エジプト記に書いてあるとおり。「マナ」は「これは何だ」という意味の言葉ですが、天から降ってきた。それでもつてとにかく食をつないだという。

録して「天よりパンを彼らに与えて食わしめたり」と云えるが如し³² イエ
ス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、モーセは天よりのパンを汝らに与え
しにあらず、然れど我が父は天よりのパンを与えたもう。

「モーセがくれたのは、あれは本当の意味の天来のパンとは違う。けれども、この
わが父なる神は本当の霊界からの真のパンを与え給うのだぞ」

と。

³³神のパンは天より降りて生命を世に与うるものなり³⁴ 彼等いう『主よ、

そのパンを常に与えよ』

「いつもくださいよ」と。あいかわらず、どこかにそういうものがあるかと思つたんだね。

³⁵イエス言い給う『われは生命のパンなり、

「私がそのパンなんだ。私が生命のパンだ」と。

我にきたる者は飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。



「なからん」なんて、ギリシア語は未来形を使つてあるけれども、

「いつまでも渴くことがなくなるよ」

ということなんだ。将来もずっとそうなるよという未来のことに係わっているから、未来形を使つただけのはなしで、日本語でもつて「であろう」なんて訳してはダメだ。「渴くことがないであろう」なんて、そんなとぼけたようなことをキリストは言わないですよ。

「これからもずっと渴くことがないぞ」

と、未来のことにわたつて言っているんですから。そんな気の抜けた訳し方がしてあつたつて、あなた方は読み方を自分で変えなければダメです。

「決して渴くようなことはありませんよ」

という。未来に関する事柄だから未来形を使つただけのはなしで、「であろう」と言うとか何か「けだし、しからん」式な、パーセンテージが少しゆるんでくるような蓋然性^{がいぜん}になつてしまうから。百%です。

「我にきたる者」「我を信ずる者」と、畳みかけて同義的に使つてある。「信ずる者」とは「きたる者」と同じ。「我にこよ」も「我を受けよ」もみんな同じことです。それがみんな「信ずる」ということ。そういうキリストの言葉の気合をつかみそこなつていてはいかん。

「私に来る者は、私を受けとる者は、決して飢えることがなく、渴くことはない」

と。

●我は生命のパンなり

³⁶然れど汝らは我を見てなお信ぜず、我さきに之を告げたり。³⁷父の我に賜うものは皆われに來らん、我にきたる者は、我これを退けず。³⁸夫^{それ}わが天より降りしは我が意^いをなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。

「聖意を體現せんがために私はお前たちのところにやつて來た。これが徴だぞ。私は聖意體現の徴である」

と。「私は徴である」と言うのと同じことです。

³⁹我を遣し給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして終の日に甦えらする是なり。

永遠の生命に甦る。永遠の生命にいよいよ展開していく。

⁴⁰わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし』

「すべて子を見て受けとる者が永遠の生命を得る是なり。何となれば、私は永遠の生命そのものであるから」



と。ヨハネ伝では「永遠の生命」と言う。マルコ伝やルカ伝では「神の国」と言う。マタイ伝では「天国」と言う。みんな同じことです。神の支配してありたもうところ。「支配」ということは力をもつてそこに浸透していることを「支配」と言っている。力のない支配の仕方なんて、そんなものは観念です。神の実力がそこに浸透している世界、そこが即ち、「バシレイア」「天国」「神の国」です。我々の中に今、キリストの霊が、御言が浸透している。この場が即ち神の国である。我々は即ち、神の国の人、天国人である。そういう消息を積みかけて仰った。

41ここにユダヤ人ら、イエスの『われは天より降りしパンなり』と言い給いしにより、⁴² 呟ひそきて言う『これはヨセフの子イエスならずや、我等はその父母を知る、何ぞ今「われは天より降りし」と言うか』

あいかわらず、文字面を正面的に解釈するからね。

43イエス答えて言い給う『なんじら呟ひそき合うな、

呟ひそきは全然ダメです。呟ひそき、疑い、恐れ、これはみんなダメ。

44我を遣つかしし父ひき給わずば、誰も我に来きたること能わず、我これを終の日に甦よみがえらすべし。

「父が引かなければ、誰も来ることができない」と。

「それでは、行こうとしたって、行けないではないですか」

なんて、それは普通の論理だね。主と交わり、神を信ずる、神を拝み、神を畏れる。そういう魂でなければ、実は「来い」と言ったって来れないんです。そうでなかったならば、来たって、嘲あざわらむくらいのものだ。または、悪口を言うくらいなものだ。そんな者はなにも来る必要はない。

45預言者たちの書に「彼らみな神に教えられん」と録されたり。すべて父より聴ききて学びし者は我にきたる。⁴⁶ これは父を見し者ありとにあらず、ただ神よりの者のみ父を見たり。

「ただ神よりの者」というのはキリストのことですよ。「神から来た者だけ、私だけが父を本当に見ている。みんなはまだそこまではもちろん行っていない」と。

47誠に誠に、なんじらに告ぐ、信ずる者は永遠の生命をもつ。⁴⁸ 我は生命のパンなり。⁴⁹ 汝らの先祖は荒野にてマナを食くいしが死にたり。⁵⁰ 天より降るパンは、食う者をして死ぬる事なからしむるなり。

「天よりのパン」というのはもちろん自分のことであります。昔のああいいうちよとした奇蹟きせきみたいなこととは違うんだと。

●我を喰い我を飲め

⁵¹ 我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。



我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん』

今度はここに「肉」という言葉が出てきた。

52ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』53 イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わす、その血を飲まずば、汝らに生命なし。54 わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦えらすべし。

はい、54節は大事な節です。ここから私は今日の「我を喰い我を飲めよ」という表題をつけた。

「人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、お前たちには生命がないぞ」

と。この「食う」という字は「噛みつく」ような字です。よく噛むことです。噛みつく、噛みしめる。ちょうど、犬が、肉の少し付いた骨をやると、一生懸命でそれをなめたり、しゃぶったり、しまいいは骨まで食ってしまうからね。犬にやるには、鳥の骨は硬くて内臓に突き刺さるから、牛の骨にかぎる。牛というのは本当に無駄のない動物で、全部食われるようにできている。食われたり飲まれたりね。イエスは牛だと、そんなことは書いてないが(笑)。

「わが肉をくらい——骨をしゃぶるなんていう言葉があるけれども——わが血を飲

む者は永遠の生命をもつ」

なんて随分、殺伐な言葉ですけれども。あまりみんなが分からないものだから、キリストは極端な言葉を使わざるをえない。いかにユダヤ人が観念信仰であるか。今のキリスト教界が観念信仰であるか。それはいつまでたつても、論より証拠、生命がないじゃないですか。堅苦しくなるばかりで。へたすると、パリサイになって人を見下したりなんかする。とんでもない話だ。

創世記9章のところに、

「4然れど肉をその生命なるその血のまま食らうべからず。

肉を食べるときには血をしぼつて、肉は肉として食べろということです。

5汝等の生命の血を流すをば我必ず討さん。獣之をなすも人これを為すも我討さん。凡そ人の兄弟人の生命を取らば我討すべし。

その仇をするということです。

6おおよそ人の血を流す者は人その血を流さん。そは神の像のごとくに人を造りたまいたればなり。」(創世記9:4～6)

血は即ち生命の在るところだということです。血は生命のあるところで、血を流す者は即ち、生命を取ることだ。人間の血は三分の一流れたらもう参ってしまうのかい。骨は切られたって何ということはないけれども。足や手がなくなっている人もある。両手がない人は口



でペンを持つてものを書いたりする。手足がなくても生きている。ところが、血が三分の一流れたらまず参ってしまう。だから、

「血は即ち生命のあるところ」

と思うのも当然であります。

「自分の全存在を食べる。食べたり飲んだりしろ」

と言う。

● 一体・内在関係

ヨハネ書簡の一番先に、イエスというひとを、

「^{はじめ}太初より有りし所のもの、我らが聞きしところ、目にて見し所、つらつら

視て手触りし所のもの、即ち生命の言」(ヨハネ一1:1)

と書いてある。イエスという人は、私たちに接して、具体的にキリストが按手をすれば、つらつらキリストは手をもつて触つてくださったわけです。一番、人間の感覚で強いものは触るという感覚です。盲人の方でも触つてあげないといかん、握手をしたりね。友情が伝わらないわけです。絵描きは目で花を食べているのではないかと思う。音楽家は耳で音を呑み込む。彫刻家は手で姿を――相手を触るわけではなからうけれども――手で相手を触るようにして彫刻するわけだ。彫刻家は一番直覚的なんだ。ロダンなんていうやつはまさにそうでしょ。

目や耳や手や口や、すべて五感に訴えるところのものの表現をもつて、具体的に相手を受けとるということをして、「自分を受けとりなさい」ということを、キリストは言いたくてしょうがないわけです。けれども、困ってしまうな。

「人の子の肉をくらわず、血を飲まずば」

というこの言葉が、文字通りにはどうにもならん。けれども、キリストはこれにおいて何を言わんとしているか。キリストの肉は霊肉であります。キリストの血も霊血である。霊の肉であり霊の血であつて、人間イエスのことを自ら仰つてゐるわけではない。また、

「これは聖餐式をあらかじめこういうふうに言った」

なんて、そんな解釈なんかしているのはとんでもない。とかく、教會的な解釈はそんなことになる。最後の晩餐でそうなされたから、それと似たような言葉だなんて思つたつて、そうではない。最後の晩餐にしたつて、そうじゃない。

「これはわが血なり、わが肉なり」

と言つて、パンを裂き、葡萄酒を共に飲まれたけれども。何もそんな形をしてどうのこうのというわけではない。あいかわらず、プロテスタントでもカトリックでも聖餐式をやつてますけれども、それが形式になつてしまった。あれはひとつのまじわぎみたいなことになつてしまった。それを通して本当に靈的に与るといふのならまだ分かりますよ。何も聖



餐式をけなすわけではないけれども。洗礼にしてもみんなそうです。

「霊的な——自分という霊の肉と血でもってできあがっているような——この私を受けとれ、食らえ」

と。これはさつきから申し上げている通り、祈りそのものが行為であるから、祈りの世界でこの中に入っていないかなくては受けとることができない。もうひとつ言うと、この「肉を食らわずば」という肉を——なにも、それがそういう意味であると私は言うのではないけれども——その肉においてそのキリストの行為を、血においてキリストの言葉を、即ち、福音書に現われているところのキリストの言行の自由自在なその実存というものを、我々が福音書を読んでこれを受けとる。即ち、キリストの行為を行為的に受けとることが肉である。真似するのではない。キリストの行為をそのまま行為的に受けとり、キリストの言葉をそのまま血の如くにしてそれを飲む。わがうちにキリストの言葉が生き、わがうちにキリストの行為が移るような、そういう受けとり方を、この福音書にぶつかってしていけば、即ち、

「キリストの血を飲み肉を食らう」

ということになる。

我々の実存面が、キリストの言葉と同質の言葉となり、キリストの行為と同質の行為がそこに展開していくようなことになってきたらば、本当にキリストの血と肉を食らっている事実になる。食らえばまたそのものになる。食らうとは即ち、祈りの世界で本当に霊的なキリストの血を飲み、霊的なキリストの肉を食らうということ。そのことを言っておられる。そのあとでキリストがそのことに触れておられますけれども。

そういうように、噛み付き、よく咀嚼する者、それは、

55 **それわが肉は真の食物、わが血は真の飲物なり。** 56 **わが肉をくらい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。**

「わが肉をくらい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る」

という56節がまた大事な節です。「居る」というのは交わる世界です。「宿る」とか「居る」とかいう。この「居る」というのは「宿る」という字ですから。この「くろう」という字は「よく咀嚼し、噛みつく」という字です。

「私の肉をよく噛んで食べる者、わが血を飲む者は、私の中にとどまって居り、またそのように私も彼の中に留まるのである」

と。そういうようになっていくから、もう一体だというんです。中に留まっているのだから。内在関係だから、さっき言った交わる世界です。

「私はキリストの中にいて、キリストと私はもう離すことができません。離れるわけにまいません。私自身がどう動揺しようとも、そんなことは関係ないんです」

というだけの世界に魂が入ってしまう。フツと気がつけばもうその中という世界ですよ。



自分をどうのこうのなんて考えているひまなんかありません。それは、何か非常に取り澄ました、また何か非常に精神統一なんかしたりするような、そういうことではない。絶対無条件に、あるがままにその中に在るという世界です。

「どうしなくては食べてはいけない」

なんて、キリストはどこにも言っていない。仮定法でなんかもを言っていてやしない。

「あるがまま食べたらよからう。そのままでもいい。あるがままで飲みなさい。わが

肉をくらい、わが血を飲め」

と。我々の鼻は空気を吸って生きている。我々の口は食物を食べて生きている。我々の目はうるわしいものを見て生きている。我々の耳は音楽を聞いて生きている。この世界から花や音楽を取ってしまったら、また美しい絵やなんかを取ってしまったら、非常に殺伐たるものです。これはみんな我々が生きているひとつの現象面です。また我々の頭は知識を求めて、知識を得て生きている。知識欲というやつはそういうわけだ。とにかく、我々のすべての働きは、それぞれの働きを通して生きている。それがなかったら、何か欠けてしまう。

そして、我々の魂は神の気、神気、生命を吸って生きる。その我々の魂が神気、聖霊を吸って生きる事態が、

「わが肉をくらいえ、わが血を飲め」

という事態なんです。いいですね。これが根元なんです。この根元がないと、他のもので生きていても、何か欠けている。根元的な何か欠けている。何か事にぶつかると、しよげたり、嫌になってみたり、何のかんのと、もう事実が証明している。

だから、私は、宗教のことは万人の事柄で、万人の根本的なことであると、学生諸君に言うんだ。しかし、ある程度聞いたような顔しているけれども、本当にそれに命懸けでつくんでこないものだから、惜しいなあと思う。今は、獨協大学から来ているのは三人しかない。もう辞めようかな。私みたなものにぶつかっていて、惜しいですよ。私は人間小池のことを言っているのではない。その中から出ている、その中に在るものを、お前たちは見損なうなど。

「わが肉をくらい血を飲む者は我に居り、我もまた彼に居る」

と。私たちは空気の中にあつて、空気でもつてとにかく私たちの肉体的な血は30秒できれいになって回転してやつていいるんだ。いわんや、その霊的な血は、神の言葉は。

●霊なり生命なり

⁵⁷ 活ける父の我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。⁵⁸ 天より降りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらず、此のパンを食うものは永遠に活きん⁵⁹ 此等のことはイ



エス、カペナウムにて教うるとき、会堂にて言い給いしなり。

⁶⁰弟子たちの中におおくの者これを聞きて言う『こは甚だしき言なるかな、誰か能く聴き得べき』⁶¹イエス弟子たちの之に就きて**咄く**を自ら知りて言い給う『このことは汝らを躓かするか。』

弟子たちだよ。民衆ではないんだ。弟子たちがあいかわらずこんなことを言っている。

「先生は少ししうがない」

と。藤井先生が、

「僕の道はだんだん狭くなるが、君たちがついて来れるかどうか知らんよ」

なんてことを一回言われたことがある。私もとにかく一週一週が前進また前進です。一回毎に進んでいくので、この日曜を何のかんのと理由付けて来れない人は自分でみずからその道をふさいでいるだけの話。けれども、どうぞ、

「これ逃すべからず」

と言つて、付いて来てください。

⁶¹イエス弟子たちの之に就きて**咄く**を自ら知りて言い給う

ちゃんとその心の中は読めているからね。

『このことは汝らを躓かするか。』

「私が食らえ飲めと言ったことがお前たちを躓かせるか」と。

⁶²さらば人の子の原居りし所に昇るを見ば如何。

霊界に昇ったら、お前たちはどうするのかねと。

⁶³活すものは霊なり、肉は益する所なし、

この場合の「肉」というのは、今、キリストが「肉を食らえ」と言った「肉」とはちがう。

「お前たちは、私が肉を食らえ血を飲めと言ったときに、この相対的な現実の肉を食らえ血を飲めと言っていると思つてゐるが、それはとんでもない誤解だ。私の言葉は全部、徴だよ」

と。言葉自身が徴です。その言葉という徴を通して実体、世界の世界、現実の世界、霊界の本当の現実を——霊界というのは何かどこかに在るということではない。我々のこの相対的現実の中に霊界が溶け込んでいるんですから——それを読まないから、そういう意味で、

「お前たちが思うようなそんな肉肉の意味では、それはダメだ。私の言葉は、全部

これは霊の現実のことを言っているんだ」

と。もう始めからそうです。その会話を聞いていると、みんな次元のズレがある。霊的次元のことを具体的な言葉でキリストは表現しているのだから。

旧約聖書の預言者の言葉だつてそうですよ。神さまの目だとか、手だとか、口だとか、足だとか、いろんなことを言う。けれども、決してそれは偶像的な意味で言っているのではない。神は霊なるもので、誰もこれを端倪することができません。その端倪することの



できない事実を具体的な言葉で表現しているだけのことはなしです。だから、イスラエルの宗教は決して偶像崇拜にならなかった。そこにイスラエルの宗教の霊的健全性がある。いわば詩的表現をしているわけです。けれども、それは単なる詩文ではない。そういった具体的な言葉を通して霊的な現実を語っている。

「それは詩文だ、ひとつの譬えだ」

なんて思っただけ、そんなのはダメです。そんなのはいつまでたつたつて、本当の世界に入れない。

わが汝らに語りし言は、霊なり生命なり。

これはキリストの語られた言葉の中で最も大事な言葉の一つです。これを受けそこなつたら、聖書はいくら読んだつてダメです。聖書解釈なんて、意味ばかり考えている。

「ここは、先生、どういう意味ですか」

なんて。そんなのには私は答ええないよ、意味なんて言っているのは。意味ではない。その言葉そのままを本当に「霊なり、生命なり」として読めるか読めないか、それだけの話です。それを霊とし生命として食べる。その言葉がひとつの暗号であり徴である。その暗号、徴が示している根元の言葉の事態は何であるか。それを直ちにその言葉から受けとるような魂にならなければ。

道元が「自得内証」と言っただけで、自分で得て、本当のものの本質の性が見えなければだめだ。その自得内証の事態は、お釈迦さんも言っただけ。

「八万四千の法を説いたが、一つも説かなかった」

と。キリストは、

「聞く耳ある者は聞くべし、目ある者は見るべし」

と言う。それは自分で本当に食べてみないと。

「こんな」馳走がありますね、おいしそうですね」

なんて言っているうちは、食べてみないと。どうぞ召し上がってください。

「そのカロリーはどうですか」

なんて、そんな研究ばかりやっている。

「カロリーが足りなければ、よしませう」

なんて。そういうような食物研究、聖書研究ばかりやって、食べることをしないような在り方は、いくら何年、聖書を読んでも、聖書の扉は開かれない。

「わが語りし言は霊なり、生命なり」

というんですから。どうぞ、皆さん、この福音書をお読みになるときに、キリストの行為であつても――語った言葉ばかりではない――行為も、

「わが行いし行為もまた霊なり、生命なり」

です。キリストは言葉だけを仰つたけれども、行為だつてそうです。それが直ちに霊であ



り生命であるという。この言行は——申し上げているとおり——ドラマだということです。

「ドラマだから、キリストにぶつかりなさい。眺めていたらいけません。傍観していたらいけませんよ」

と。集会で傍観的であつたら、他の妨げとなる。

「わが言は靈なり、生命なり」

という言葉を読んだだけでも何ともいえない。即ち、イエス・キリスト自身が靈言でありました。ヨハネ伝1章14節に、

「言は肉となつて我々の間に宿つた。幕屋を張つた」

と。イエス・キリストが即ち言なので、言を発しようが、行為を発しようが、それはみんな靈であり生命であるに決まつている。この聖書を読んで、その言がジーンと、自分の中にはらわたの中にしみ込んでいくような読み方をしないと。命懸けの祈りをもつて、祈りの体勢をもつて、そこにぶつ倒れていく。そうしたら必ず力がきます。力なきものは本当ではない。上からの本当の力、生命が——何と言おうともいい、光と言おうが何と言おうがいい——それが浸透してくる。火と言おうが、水と言おうがいい。これが浸透する。

⁶⁴されど汝らの中に信ぜぬ者どもあり』

あいかわらず、受けとらない。

イエス初^{はじめ}より信ぜぬ者どもは誰、おのれを売る者は誰なるかを知り給えるなり。

「まあ、信じていても、結局は躓くね」ということは分かっている。

「この靈が来るまでは、私の行為も言もみんな躓きだ。今に御霊が来たら、お前たちは、私の言つたりしたりしたことがみんな全存在で分かるよ」と。

●逆徴の福音

預言者ホゼアという人は、

「エホバを知る」

という言葉をよくさん使っている。今私が「分かる」と言つたのが、「知る」ということ。この「知る」というのは本当に存在的に分かることで、存在的に受けとることを「知る」という。旧約のヘブライ語の「知る」はそういう意味を持つている。本当に交わつてその中に入つて、それを内観し一体に感じて、内側から見て、内側から聞いて、受けとる世界がこの「知る」という。詩篇139篇で神さまがそのように私たちを知つておられるから、私たちもそのように神を知るということになる。それはキリストを受けとることによって、その知る世界に入るわけです。

ところが、そういう受けとり方をしない連中がお前たちの中にいるよと。

⁶⁵斯^かて言いたもう『この故に我さきに告げて父より賜わりたる者ならずば我



に^{きた}来るを得ずと言いしなり」

66 ここにおいて弟子等のうち多くの者、かえり去りて、復^{また}イエスと共に歩まざりき。

イエスはついに単独者となる。みんな蹟いた。

まあ、この集会をやっている、会員が出たり入ったり、いろいろです。やむを得ずして、東京にいられないで遠くに行ってしまう、ときに便りをよこしたりする。そういう人たちは、距離がどんなに遠くなっても、決して去ったのではない。けれども、

「やれ先生がどうだ、やれ集会の誰々がどうだ」

なんて言って品定めをする連中はみんな去っていく。いいです。私は聖人でも君子でも義人でもない。私は罪びとにすぎない。

京都の便りの中に面白いのがあった。

「先生は学者か馬鹿者か神さまか何だか訳のわからない人だ」

という。その通りなんです（笑）。そういう不可解なるものを通して現われたもうところの事態、そこにおいてまた私が悲願しているところの事態、現われたもうところの本願の事態、これを見て共感している人はどんなことがあっても蹟かない。

ところが、いわゆる肉的に私を見ている人は蹟いてしまう。内村先生でもそうです。誰にしたってみんなそうなんです。もし、非常に立派な先生がいて、

「ああ、あの先生ならいい」

と言つてやっている人は、実は本当は福音をつかみそこなってしまう。それは人間に魅せられているだけのなしです。だから、私みたいなだめなやつが皆さんの先頭に立っている方が、あなた方が本当に福音をつかむためには、かえっていいかも知れませんよね。

しかし、キリストに蹟いたのは別な意味だ。キリストは完全に非なき人なんだけれども、しかし、その言葉、その行為がもう次元がちがってしまうものだから、受けとれない。それで、ユダヤの伝統の宗教に反する、けしからん新興宗教くらいに思ってしまうから。弟子たちもみんな蹟いて、とうとう最後にペテロまで蹟いてしまつて、おしまい。キリストはただ独り十字架につく。

「しかし、お前たち、とにかく祈つて待っている。そうしたら、私が今度は本当に

蹟れるから」

と。復活体として蹟れました。それから最後に聖霊として蹟れた。あの復活体として蹟れただけではだめですよ、もちろん。あれは第一段階だ。次は御霊をもつて上から本当に深く降ってきた。そして、その御霊を深く受けとり、これを信じ受けとった、信じ交わった世界に入った。

このペテロたちはみんな蹟いた連中です。パウロは直接にキリストを知らなかったけれども、これも蹟いていた。イエスを信ずる者に蹟いていた。そいつを今度は、パウロをひつ



くり返した。みんなひっくり返しですよ。一遍ひっくり返らなければどうにもならない。これが即ち、福音がいわゆる文化とは反対の方向を持つていながら、実は文化を本当の意味において、人間の世界を支え、またこれを展開する。ここに普通の意味とはちがう「言の逆らいの徴」という、「逆徴の福音」であるということがあるわけです。

●一緒にご馳走を食べようよ

67 イエス十二弟子に言い給う『なんじらも去らんとするか』

「お前たちも去ろうとするか。仕方がない。御霊が来るまではどうにもならないんだよ」

と。キリストの胸のうちは天的な涙があります。

68 シモン・ペテロ答う『主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言は汝にあり。』

69 又われらは信じ、かつ知る、なんじは神の聖者なり』

ペテロらしいことを、百点満点の答えは言うんだけど、残念ながら、彼は本当にそこに即するまでにはまだいかない。しかし、聖霊が来たら、ペテロは本当に殉教の死を遂げるほどの使徒となりました。

70 イエス答え給う『われ汝ら十二人を選びしにあらずや、然るに汝らの中の

一人は悪魔なり』

ユダの中に悪魔が入っている。ユダは優れた優秀な弟子なんだ。優秀な弟子というのが危ない。これがサタンに見込まれるわけだな。そして反逆の精神がかかっていく。

71 イスカリオテのシモンの子ユダを指して言い給えるなり、彼は十二弟子の

一人なれど、イエスを売らんとする者なり。

キリストが「食え、飲め」と仰ったことを、もうひとつ言いますと、イエスという方は禁欲的な人とはちがって、飲んだり食べたりすることが好きなんだよな。だから、キリストの譬話には饗宴の話がたくさん出てくる。こないだ、京都でも引用しましたけれども、ルカ伝14章15節以下に、

「15 同席の者の一人これらの事を聞きてイエスに言う『おおよそ神の国にて食

事する者は幸福なり』¹⁶ 之に言いたもう『或人、盛んなる夕餐^{ゆうげ}を設けて、多

くの人を招く。』(ルカ14・15・16)

と書いてある。これも飲み食らう世界だ。せつかく、饗宴を与えようとするのに、

「いや、こういう理由で私は行けません」

と、そこにたくさん理由が出ている。集会はこれ饗宴であります。神の言の饗宴です。我々が神の言を本当に、「これは霊なり、生命なり」を食らう饗宴である。それを何のかんのと言って、来なくなってしまう。命懸けで、生命の糧であるところの神の言を食らわんではない。それは自分でただダメになるだけの話です。最後の黙示録3章のところを見れば、



「私はお前の戸の外で叩いているではないか。お前さんの魂の戸の外で私はいつも叩いているのに、どうして開いてくれないかね。もし、お前が開けば、私は中に入る。そして、一緒にご馳走を食べようよ」

という。私は、あれは大好きなところですよ。

「²⁰ 視よ、われ戸の外に立ちて叩く、人もし我が声を聞きて戸を開かば、我その内に入りて彼とともに食し、彼もまた我とともに食せん。」（黙示録3・20）

と。一緒にご飯を食べようと思っている。一緒に神さまの言を食べようと思っている。いや、実にキリスト自身が神の食物である。

「私を食らわしてやるぞ。私を食べなさいよ」

と言つて、イエスは入ってくるんだ。

イエスは神さまを食べていたひとですよ。いいですか。イエスは神を食べていた。神は彼の食物である。また、神の御意を行うことがまた彼の食物である。私たちはキリストを食べて、キリストを飲んでいる。この霊なるキリストを飲みかつ食べたら、私たちの中にその霊的な生命が溢れてくるから、今度は人に食べさせる人になる。食べてお終いではない。本当に人に食べさせる。

「どうぞ、お入りください」

と。自分がお腹がすいても喉が渴いても、人がこの生命を食べるのを見て、また飲むのを見て、悦ぶ人となる。お母さんが、もしその子どもがひもじいときには、自分がひもじくても、子どもに食べさせるではないですか。

そういうような、本当に生命は生命^{いのち}させるものである。本当の生命は、限りなく人を生命させるものが生命である。生命は私^{わたし}するものではない。天からくるところのキリストの生命は、かく流れて与えられてやまざるところのもの。それが五千人を養ったのであります。世の末までも地の果てまでも私たちに永遠の生命を与えてやまないところのもの。これキリストという盛んなる食物である。おしまい。

